

広島経済大学経済学会

2016年度 第4回研究集会〔2017年1月26日(木)〕報告要旨

アフター・ザ・フォール

——現代アメリカ演劇とその研究の動向——

森 瑞 樹*

本研究報告は、発表者の枢要な研究分野である現代アメリカ演劇に関して思索されたものである。演劇／演劇観の歴史の変遷、及びそれらを相対化してきた哲学、社会学等の知の諸分野との関係性から導かれる物語性を通時的に追うことで、アメリカ史に残る未曾有のカタストロフとなった9.11以降のアメリカ演劇の諸相とその研究の動向を射程に収めようと試みた。そこでおこなわれた思弁の概要を以下に記す。

第1章は、現代アメリカ演劇のあらましを措定するうえで不可欠となる伝統的芸術観と演劇観に焦点を合わせる。まずは、芸術にたいして施されたユングとハイデガーの思弁の結果¹⁾が図らずも照応関係にあることを確認し、そこから伝統的芸術観たるべきものを抽象化する。そこで浮上するものは、集合的無意識として人びとの内にあった原風景や原体験を表出させ、それを共有させることで、普遍的価値を持ったものを創造する実践を芸術とするという言説である。これを勘案するならば、すなわち芸術は、神話や宗教等とも不可分に結びつき、不特定多数の一己をひとつの共同体(=アイデンティティ)に縫合し、つなぎ留めるものとして現前する。

このような伝統的芸術観であるがゆえに、古代ギリシャにおいて神話を織り込みながら宗教的な祝祭の儀式として抬頭した演劇²⁾自体もそ

の内に可逆的に包摂される。また、アリストテレス的ミメシス(現実の再現)としてある演劇的スペクタクルでありながらも、そこにおいて直接的ではない間接的な裏の意味が惹起されると言われる所以は、取りも直さずこの演劇観に裏打ちされるべきものである。したがって、古代ギリシャにおいて絶頂を迎えた悲劇³⁾自体が、今や個人、共同体、芸術という文化的トリニティのメタファーになっているといっても過言ではない。

ここで克明にされる演劇観は、もちろん古典古代の作品においてのみ有効な参照枠となっているわけではない。この演劇観は中世以降のキリスト教の台頭と歩調を揃え、その後長く続く欧米演劇の骨子ともなっていた。これは例えば、教義を布教するために演劇というメディアの特性を占有し⁴⁾、その世界観を刻々と拡張させてきたキリスト教の姿そのものが雄弁に物語っている。

このような西欧的価値体系を引きずりつつ開闢されたアメリカにおいて、演劇はいかなる想像力を掻き立ててきたのか、第2章ではジェームス・ネルソン・バーカーの演劇作品 *The Indian Princess* (1808)⁵⁾ にその緒の一端を求めてみる。

黎明期のアメリカが旧世界との間に容易に跳躍することのできない断絶を生むことになったとすれば、それは偏に独立戦争での勝利によるものである。すなわち、女神に微笑まれたはず

* 広島経済大学経済学部助教

のアメリカは、もはやイギリス的価値観に回帰することは叶わず、ゆえに皮肉にも国家的アイデンティティの不在という陥穽に陥ることになった。ここから不可避的に立ち現れるアメリカ的アイデンティティへの希求⁶⁾に、*The Indian Princess* は原風景の創造／想像をもって応じる。この作品では、アメリカ初源の入植地ヴァージニアでの白人とネイティブ・アメリカンとの邂逅が描かれる。そしてここで目を向けるべきは、ロマン主義⁷⁾の影響を色濃く写すこの作品の自然情景描写である。ここにおいて極彩色豊かに彩られるヴァージニアの地塗りにエデン的世界観を見透かすことは容易い。すなわち、*The Indian Princess* はヴァージニアに楽園的エクリチュールの上書きを施し、形而上学的系譜に位置付けることで、それをアメリカ的原風景として開示するのである。その後のアメリカにおけるヴァージニアへの憧憬はバーカーの演劇的想像力の差し響きを如実に物語っているだろう⁸⁾。

古代ギリシャより連綿と続いてきた演劇観を伝統的演劇観とするならば、20世紀中葉を頃おいにそれとは位相を異にする演劇観が立ち現れる。第3章においては、ポストモダニズムへの言及と共に、それと共振する新たな演劇観に焦点を当てる。

ニーチェ哲学の中核をなすかの有名な神の死亡記事⁹⁾は、その後のポストモダン思想の源泉のひとつともなっている。絶対性への徹底した懐疑心を含み持つこの思想は、それゆえにリオータル流の大きな物語の崩壊という言葉へと敷衍してくる。そこにおいては、いかなるアプリアリ概念も遍く形骸化される。したがってそれが演劇的慣習へと闖入する次元においては、その慣習そのものの在り方が問い直されることとなる¹⁰⁾。そして例えば、このようなポストモダン思想と高い親和性を見せる劇作家のひとりサム・シェパードである。戯曲と呼ぶのも躊躇われるほど、彼の戯曲¹¹⁾には物語展開が皆

無であり、登場人物達の発話の意図ですらも判然としない。換言すれば、シェパード劇を目の当たりにした観客はすなわち、自身の眼差しに取り憑いていた演劇にまつわる通念に対峙せざるを余儀なくされる。

このような形式そのものへの懐疑と共に、ポストモダニズムは主体といった概念も相対化の俎上にあげていった。その結果、絶対的な自己(アイデンティティ)の幻想性、つまり特定のイデオロギーの影響下における後天的なアイデンティティの形成過程が明るみに出される。そしてこのような思弁は、バトラー流のパフォーマティビティ論¹²⁾の呼び水となっている。そこにおいては、ジェンダーやセクシュアリティ等の概念枠は攪乱させられ、それゆえに多様な様態への可能性の地平が切り拓かれる。だからこそ、人種、ジェンダー、セクシュアリティを基軸に据える数多の演劇は、政治的アクティビズムの文脈においてこの理論を取り込み、新たな自己や共同体の有様を幻視させ、それらを観客に受容させてきた。

ポストモダン思想により惹起された新たな主体の在り方に、道徳的もしくは倫理的反駁を加えることは難しいとしても、それらが孕む文化的解釈が必要とされる側面には改めて目を向けなければならない。このように形成される主体の物語的側面、謂わば常に既に完成されたパッケージとして主体が提示される様は、ある意味でポストモダニズムが瓦解させた観念論への逆説的な回帰を浮き彫りにする。つまりそれは、世界の見取図、そして未来図を描出することができるというアメリカニズム的想像力を牢固たるものに精錬するのである。しかし、9.11というカタストロフは、修辭的な意味のみならず字義的な意味においても、アメリカから言葉を奪い取った。すなわち、ここにおいてアメリカの物語を書く能力に大きな疑問符が突き付けられたのである¹³⁾。そこで最終章においては、この

ような9.11以降のアメリカ演劇のあらましを素描してみたい。

9.11がアメリカに取り憑く観念論の亡霊的残滓を剥き出しにしたとすれば、それは同時にイノセンスから経験¹⁴⁾への通過儀礼ともなった。つまり、アメリカニズム的物語の庇護の下で夜郎自大になっていたアメリカ的想像力は、テラインコグニタに放逐され、新たに自らで危機的諸問題に対する解決策を探し求めなければならなくなったのである。それゆえ、例えば *Rabbit Hole* (2005) や *August: Osage County* (2007) のように、肉親の死を契機に、その表象不可能な死により惹起される不和や葛藤そのものを物語化する演劇が現れ始めたのも偶然ではない。

また近年のアメリカ演劇に頻出する亡霊への関心の高さは、9.11以降の謂わばラカンの現実界¹⁵⁾に突き落とされたアメリカ的想像力の新たな身振りの可能性を示唆している。演劇の舞台上という現実と幻想が奇妙に交錯する領域で、表象不可能な死を伴い実存の役者によって演じられる亡霊は、新たな主体性や身体性の在り方を表象の此岸に呼び戻す可能性を垣間見せてくれる。この点に関しては発表者の現在進行形の課題として残されているので、今後の研究成果で克明にしたい。

注

- 1) ユングの思想に関しては *The Spirit in Man, Art, and Literature*, またハイデガーのものは "The Origin of the Work of Art" を参照のこと。
- 2) 紀元前7世紀頃のアテナイで作られたディテュランボス(酒神賛歌)が演劇の起源と考えられている。これは酒神ディオニュソスを称えるためのものであった。
- 3) 悲劇は神々が全てを司る世界観でこそ成立する。そのような世界観において、争うことのできない神々の定めた運命に翻弄される主人公の姿は、神々に対する畏れを喚起する。この畏怖の念を集団に喚起させることこそが、共同体の形成を促していた。
- 4) キリスト教がその教義を流布するために演劇を利用したのは、非識字者が圧倒的多数を占めていたからである。
- 5) この作品は、ディズニーでも映画化されたネイティブ・アメリカンの少女ポカホンタスが初めて物語化された作品である。この作品は、冒険家ジョン・スミスの虚実が織り混ざった冒険譚に着想を得ているが、それゆえにアメリカの白人至上主義的、また帝国主義的側面を自ずと強調している。
- 6) 当時のアメリカでは、アイデンティティを追求の、そして消費の対象として捉える風潮が生まれた。詳しくはロバート・J・マクドナルドの論考を参照されたい。
- 7) 教条的な新古典主義への反動として生まれたロマン主義は、自然や原始性に価値を見出し、それをもって自我の解放を志向する。ヴァージニアの環境やネイティブ・アメリカンの存在はまさにこのロマン主義的思考と高い親和性をみせる。
- 8) 例えば、ジョン・デンバーの楽曲 *Take Me Home, Country Roads* (1971) に目を向けてみたい。雄大なヴァージニアへの憧憬を唄うこの楽曲は、全米ビルボード・チャート2位にまで登り詰めた。この事例は、ヴァージニアという局所がどれほど多くのアメリカ人のノスタルジアの対象となっていたかを雄弁に物語っている。
- 9) 「神は死んだ」というニーチェの言辭は、絶対的価値観が機能不全に陥った状況を的確に射抜いている。また、神の死の必然の結果として悲劇も死を迎えることになる。なぜなら、民衆が無自覚的に操られる絶対的な価値観がなければ、悲劇は成立しないからだ。
- 10) これと同様の理念を見せるアートは、例えばマルセル・デュシャンの『泉』(1917)とすることもできる。既製品の便器を横倒しにし、サインを記しただけのこの作品は、「芸術とは何か」という根源的な問いを投げかけてくる。
- 11) シェパードがこのような劇作をおこなったのは、主に初期と形容される1960年代においてである。その後の中期と呼ばれる70年代では、完全とまでは言えないものの、物語性を持つ戯曲を手掛けている。
- 12) 文化的慣習の反復により、本質として見紛われるジェンダーが形成される。パトラーのパフォーマティビティ論の真髄は、それを逆しまに利用することで、ジェンダーの多様性を促すことにある。
- 13) 未曾有のカタストロフとそれにつつわる余波が言語において馴致不可能であったことは、キャサリン・ベルシーの論考を参照のこと。
- 14) 9.11を巡るイノセンスから経験への議論は、リチャード・グレイを参照のこと。
- 15) 現実界、象徴界、想像界はジャック・ラカンの精神分析の中核をなす理論である。極めて簡潔に纏めると、現実界は人には認識不可能で言語化不可能な領域、象徴界は人が認識でき言語化できる領域、想像界は表象としてのイメージが喚起される領域である。

参 考 文 献

- Barker, James Nelson. *The Indian Princess*. Ed. Jeffrey H Richards. *Early American Drama*. New York: Penguin Books, 1997. 109–165.
- Belsey, Catherine. *Culture and the Real*. New York: Routledge, 2005.
- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity (Routledge Classics)*. New York: Routledge, 2006.
- Fink, Bruce. *A Clinical Introduction to Lacanian Psychoanalysis: Theory and Technique*. Massachusetts: Harvard UP, 1999.
- Grey, Richard. *After the Fall: American Literature Since 9/11*. Chichester: Wiley-Blackwell, 2011.
- Heidegger, Martin. “The Origin of the Work of Art”. Eds & Trans. Julian Young & Kenneth Haynes. *Off the Beaten Track*. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 1–56.
- Jung, C. G. *The Spirit in Man, Art, and Literature*. Trans. R. F. C. Hull. Princeton: Princeton UP, 1966.
- Letts, Tracy. *August: Osage County*. New York: Theatre Communications Group, 2008.
- Lindsay-Abaire, David. *Rabbit Hole*. New York: Theatre Communications Group, 2006.
- McDonald, Robert M. S. “Early National Politics and Power, 1800–1824”. Ed. William L. Barney. *A Companion to 19th-Century America*. Massachusetts: Blackwell Publishers, 2001. 5–18.
- Nietzsche, Friedrich. *Thus Spoke Zarathustra: A Book for Everyone and Nobody*. Trans. Graham Parkers. Oxford: Oxford UP, 2005.